

SDGs 国連が2030年までに解決を目指す持続可能な開発目標。本稿に書かれた目標は「20年までに、山地、森林、湿地、河川、帯水層、湖沼を含む水に関連する生態系の保護・回復を行う」。

NPO法人

「田んぼ」研究員



松橋玲二さん

「うっそだー」。

子どもたちにガンの話をすると、いつもつそつきだと思われます。大きくなってよその町へ行くことガンはいないこと、この地域の自然がとても大切なものであることを話す時のことです。

日本に飛来するガン類の八割以上は宮城県北部で越冬します。数百羽のガンが飛び交う風景は、地元の人にとって日常ですが、別の地域ではそうではありません。ラムサール条約の登録湿地にな

冬の間には四回実施。各回の調査数は数万羽に及ぶ。

この結果、餌場が時期とともに変化している様子が分かってきました。九月半ばにシベリアから渡ってきた当初はねぐらの近くで餌を食べますが、次第に沼から遠出をするようになります。三月ごろになると旅立ち前のソワソワした



ガンを通して地域を知る

っている蕪栗沼（宮城県大崎市）

の近くで有機農業を営む齋藤肇さんは、地域の宝物を探し出す達人です。齋藤さんは十数年前にガン類がどこで餌を食べているか調査を始めました。ガン類は沼などがねぐらですが、日中は水田で落ち穂を食べます。多くの人に協力を得て、落ち穂をついばむガン類を、種類ごとに数える一斉調査を

様子が伝わってきます。

市民ボランティアによるこの大規模な調査は、宮城県の七分の一の面積をカバーします。こんな調査は全国的に見ても珍しいです。毎回十数人が参加し、分担した場所で見望遠鏡を片手に何時間も水鳥を探す作業は大変ですが、昼食時にデータを持ち寄り、食卓を囲む調査メンバーはいつも笑顔です。

ガンを通して田んぼで起きている変化も語り合います。生きものや地域を深く知るきっかけになるし、一人ではできないことを成し遂げた達成感は、他では味わえません。「こんな市民調査が各地で始まるといいね」。齋藤さんは地域を深く知ることが、必ず未来につながることを知っています。



調査では望遠鏡とカウンターを使って何時間も水鳥を数え続ける＝宮城県北部で

※この連載は、NPO法人JKSKによる『結結プロジェクト』の協力を得ています。